

巻頭言

病院図書室の改革と 有資格司書を採用して

三菱京都病院病院長 村田 眞司

本院は、三菱グループを運営母体とする企業立病院で、設立50年の歴史を有しております。他の企業立病院の多くは、東京や大阪の地にセンター化された大規模な病院を営まれておりますが、三菱は200～300床程度の中小病院が全国に10病院存在いたします。

中小病院の悲哀は種々ありますが、中でも図書予算は言うに及ばず、“図書室専任の司書”を採用することなど夢のまた夢の時代が最近まで長く続いておりました。しかしこの原因が私ども経営母体の企業（三菱という会社）にすべて起因していないことが、私が病院を預かって早々に判明いたしました。もし敢えて企業の責任があるとすれば、会社から赴任してきた事務長以下事務職員の判断で“図書や司書の必要性”を理解し予算化しなかったことぐらいでしょう。

古き時代のお医者様が許された一昔前の医療関係者は、企業立病院故のぬるま湯的体質に身をおき、病院図書室の重要性や必要性を認識していなかったのが実状といえます。病院の改革・進歩・活性化は病院の指導的役割を担っている医師の体質がすべてであると言っても過言ではないと思います。

時あたかも、①学会の教育施設、認定医・指導医の認可及び卒後教育など従来を踏まえた医療改革の波が押し寄せて来たこと、②論文やスライドを薬剤メーカーのプロパー(MR)に依頼ができなくなったこと、③病院の活性化につながる研修医や若い医師達の本院への

赴任希望に応える環境整備をする必要があったこと、④インフォームドコンセントや医療情報の公開に対応できる院内のシステムの構築の必要があったことなど、病院図書室の発展をアクセラートせざるを得ない諸状況下にありました。すなわち医療レベルを上げるためには、本院の旧態依然とした《飾りの図書室》からの脱皮と本格的な拡充、図書費の大幅な予算編成と“専任の司書”の採用を決断せざるを得なかった訳です。

私どもの病院に新生図書室と司書が揃って丸3年になります。当初の期待通り、病院内での知的財産の宝庫に育ちつつあります。文献検索・スライド作成・書籍の充実・医療情報の早期把握など、病院長として“一応”の満足を致しております。一応と申すのは、今後も益々発展していくことを期待しているからです。

近年、医療を取り巻く環境は厳しく、どの病院も図書費や司書の人件費にしわよせせざるを得ないと考えておられる施設が多いと聞いています。しかし、私どものように最近になって図書整備を成し遂げることができた病院、すなわち、病院のレベルアップと活性化を身をもって知ったものには、“病院図書室の衰退は病院そのものの衰退”であると考えています。

多くの制約が予想される現在、「近畿病院図書室協議会」にさらに多くの病院施設が加

入され、できるだけ図書や文献の分担収集に徹したシステムの構築を期待いたします。私どもも、本協議会にお世話になるとともに、

少しでもお役に立ちたいと考えております。今後とも、諸施設の皆様のご指導をよろしくお願い申し上げます、私の巻頭言と致します。